

～夜間多尿症～

生活指導と薬物治療の効果が持続

夜間頻尿専門外来の歴史は浅く、治療と予後に関するデータは少ない。国立病院機構京都医療センター泌尿器科の伊東晴喜氏は、夜間頻尿患者のうち夜間多尿症患者の治療成績と予後を評価した。同外来で生活指導と薬物治療を受けた患者は、治療終了後も症状の改善と満足度が持続していることなどが報告された。

治療効果の満足度が IPSS-QOL改善と関連

同センターでは、2007年6月にわが国初の夜間頻尿専門外来が開設された。伊東氏は夜間頻尿の最大要因である夜間多尿の治療成績と予後を検討するため、開設からの5年間に同症の治療を終えた68例のアンケート結果を分析した。

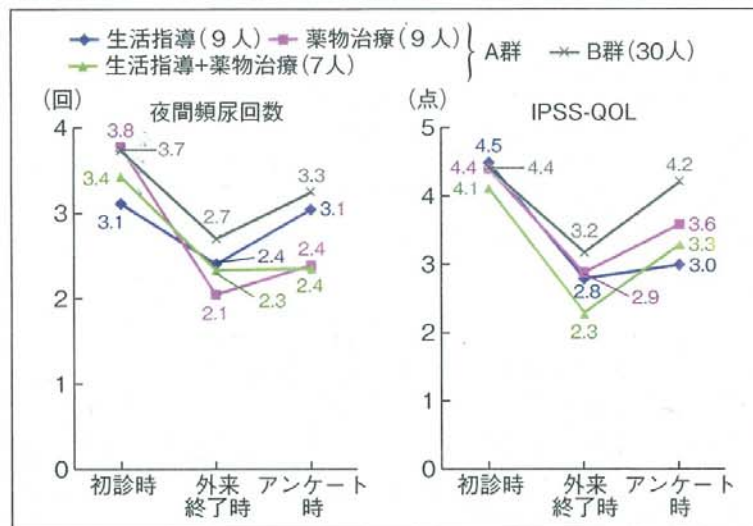
外来終了後からアンケート実施までに、同外来の受診が比較的役に立っていると感じる27例をA群、役に立っていないとした30例をB群とした。両群の患者背景を比較すると、心血管疾患を有するか前立腺体積が小さければ治療満

足度が悪く、治療抵抗性が考えられた。同氏は前立腺体積が大きい症例については「各種薬剤の効果があつたとみられる」との見解を示した。

両群の夜間頻尿回数と国際前立腺症状スコア(IPSS)-QOLの経時的変化(初診時/外来終了時/アンケート時)の検討では、夜間頻尿回数は外来終了時からアンケート時に上昇する傾向にあったが、両群間に有意差はなかった。IPSS-QOLでは、アンケート時に良好なA群とB群の間に有意差(P=0.005)があつた他、改善度でもA群が良好で、B群との有意差(P=0.02)が認められた。

役に立った治療内容別(生活指導、薬物治療、生活指導+薬物治療)の夜間頻尿回数とIPSS-QOLの経時的変化では、いずれの時点、改善度に

〈図〉役に立った内容別の夜間頻尿回数とIPSS-QOLの経時的変化



(伊東晴喜氏提供)

次ページ

も有意差はなかった。一方、生活指導が役に立ったと感じる群では夜間頻尿の改善度は小さいものの、IPSS-QOLは良好に維持されていた(図)。

以上から、同氏は「夜間頻尿外来

患者は外来終了後も治療効果の継続が認められた。治療効果に満足した群は、夜間頻尿回数よりIPSS-QOLの改善と関連する傾向にあった」との見方を示した。